男性の生きづらさと解消するための行動とは？

※ゆとり世代男性が考える！

女性の生きづらさについての情報はよく見かけるけれど、実のところ男性はどう思っているのでしょうか。「男性の生きづらさ」をテーマに座談会を実施しました。（聞き手：小田桐咲）

※「ゆとり世代」とはいわゆる「ゆとり教育を受けた世代」のことで、学習時間を減らしてゆとりを持たせるような学習指導要綱の改訂が行われた後の世代の事です。

男性の生きづらさとは？

小田桐：さっそくお話を伺っていきたいと思います。男性の〝生きづらさ〟についてどのように考えられますか？

北沢：基本的に「男だからこう」「女だからこう」という考えになることがありませんが、男性は比較的気楽なのではないでしょうか。生物学的に、女性の方がやらなければいけないことが多いように思います。月経があったり、妊娠や出産ができるのも女性だけですし、必然的に子どもと一緒にいる時間が長くなるのも女性ですしね。

坂本：そうですね。パートナーの様子を見ていても、非常に大変そうです。女性は、体調にかなり気をつけないといけないものの、いざというとき、異性の自分には言いにくいんだなと感じています。

太田：僕も、男女で生きづらさに大きな違いはないと思いますが、性の問題は大きな要素のひとつだと思います。痴漢のニュースなどもよく見ますし、女性のほうが性被害に遭う件数が多いのでしょう。だからこそ、女性専用車両などがあると思うのですが、一方で男性専用車両がないのは不思議です。男性でも被害に遭う人はいると思うので。

小田桐：なるほど。女性特有の悩みや問題はあるものの、女性だけに焦点をあてると、本当に困っている男性に気づくことができないリスクもありますね。

坂本：SNS上で、女性の権利を向上させたい！ と謳っている人たちが、まったく関係のない男性を圧迫している場面があります。そういうことが多発すると、男性は生きづらさを感じてしまうかもしれません。

太田：「差別的な考えをなくそう！」という考え自体が、従来の良さをなくしてしまったり、批判に繋がってしまう状況もありえますね。男女の話ではありませんが、世界的に有名なアニメ映画でも、黒人の主役が増えて、白人の主役が少なくなったという事例があります。

◀座談会メンバー

北沢 祥吾（きたざわ しょうご）さん
35歳。元シンガーで、現在は生活クラブ共済連にて勤務。

坂本 武琉（さかもと たける）さん
20歳。青森公立大学経営学部２年。八戸市出身。

太田 優杏（おおた ゆあん）さん
18歳。青森公立大学経営学部１年。青森市出身。

坂本：ただ、ここ数年で、女性活躍の話が増えたことは、素敵だと思います。本当にいい方向に動いて、女性の権利が向上した例もありますし。

太田：そうですね。ただ、従来の男尊女卑の考え方はまだまだ根強いと思います。例えば、管理職の人が男尊女卑の考え方を捨て切れていなければ、現場にいる人はまだまだ苦しいのではないでしょうか？ 会社や政治の組織体制やシステムそのものが、生きづらさ解消につながらない大きな原因になっているのかも。

北沢：僕はもう社会に出て働いていますが、たしかに、男性の育休取得なども話にはあがっていますが、実際に取るか？ といったら、難しい場面が多いと思います。「育休は女性が取るものだ」という考えが根強いので、そもそも男性が育児参加すること自体、世間に馴染んでいないように感じます。男女関係なく、〝目に見えない生きづらさ〟というものは存在していて、それに如何に気づけるかですよね。

小田桐：〝目に見えない生きづらさ〟ですか。具体的にどんなものが考えられますか？

北沢：会社の研修で、ハラスメントの内容がありました。「男なのに育休取るの？」というような発言もハラスメントになると思うのですが、こういったことは日常会話レベルに潜んでいるのだと思います。日々、そういった会話が交わされていたら、本当に育休を取りたい男性からしたら、非常に生きづらいですよね。

坂本：日常に潜んでるということですね。学校やサークルなど、集団のなかでは、古くから受け継がれた慣習や文化があると思います。もしそれが、時代に沿っていないものであっても、当たり前すぎて気がつかないことがあるのではないでしょうか。本当はおかしいことなのに、気が付かないから声を上げられない。

太田：僕は中高時代、剣道教室に通っていたのですが、そこがもうスパルタで。暴風雪でも、外で裸足で稽古とか普通にありました（笑）。でもそれって今ではありえないじゃないですか。時代にそぐわない指導をしていると、次第に生徒さんが減ってしまうのではないかと心配してしまいます。

小田桐：時代の変化と共に、社会の常識も変化していくということですね。時代錯誤な言動やルール、暗黙の了解が〝目に見えない生きづらさ〟に繋がっていそうです。

フラットな感覚を育むために

小田桐：ところで、みなさんのお話を伺っていると、3名ともフラットな感覚の持ち主な気がします。いつ頃からそういった感覚をお持ちなのでしょうか？

坂本：僕は幼少期から、ずっとこんな感じですかね。幸いなことに、家族から非常に大事にされて育ったと感じています。そうして暮らしていくうちに、自分と新しく家族になる人や動物たちに同じことをすれば、一緒に幸せになれるんじゃないかと思うようになりました。僕には弟や妹がいるのですが、両親が僕らに「男の子だからこうしなさい！」「女の子だからこうしなさい！」と言っていた記憶はありません。また、男性も女性も話せばわかってもらえるので、特別扱いする必要はないと両親から教わりました。そのおかげか、大学生になった今も、変に性別で区別せずに考えることができています。

太田：僕の両親は職場が同じでしたので、家にいる時間もだいたい同じで、家事も2人で分担してやっていました。ですから「父親だからこう」「母親だからこう」ということはあまりなかったように思います。また、歳の近い弟がいますが、兄弟で上下関係になるのではなく、友達っぽい感覚です。歳の離れた妹もいますが、もし彼女にいわゆる〝男っぽい〟行動が増えても、本人がそうしたいのであればそれでいいと思います。やりたいことをやりきれる大人になってもらえたら、それが一番ですよね。

小田桐：家族と過ごす時間のなかで、他者とフラットに接することを学んだということですね。北沢さんはいかがでしょうか？

（→次のページにつづく）

北沢：僕には兄がいるんですが、頭が良くて今も一流企業で働いていて、僕とは真逆な兄です。学生時代、周囲からはよく比べられました。それにすごくモヤモヤして、兄貴にはできないことで一旗あげてやろう！　という気持ちになりましたね。変に対抗心や嫉妬心を燃やすのではなくて、自分にできることをがんばろうと思って、歌の練習を始めて、シンガーになりました。

小田桐：自分のネガティブな感情を他者へぶつけるのではなく、矢印を自分へ向けて、自分自身の行動へ昇華していくことが大切なんですね。

北沢：そうですね。僕の偏見かもしれませんが、野心を持って頑張ってきた人ほど、ネガティブな矢印が他人へ向いてしまう気がします。部下に対して強い態度をとるとか、六本木で朝までキャバクラで大金を使うとか、横柄な態度になりがちなのかなと思います。

競争社会で勝ち上がってきたからこそ、頑張ってきた自分に対価が欲しくなってしまうんでしょうか。

小田桐：それこそ、高度経済成長期の日本では「24時間働けますか？」というフレーズが存在しているほど、たくさん稼いで一人前という風潮がありましたよね。今、管理職にいる人たちと、現場で働いている人とは、社会の前提が異なっているのかもしれませんね。

男女で差別を起こさないために気をつけたい行動

小田桐：最後に、男女共に生きづらさを感じさせないために、気をつけたい行動などを伺っていきたいと思います。坂本さん、いかがでしょうか。

坂本：あくまで他人は他人なので、自分の価値観で勝手に判断して、目の前の人の主張を履き違えないようにしたいです。例えば、日本にはトレンドがありますが、トレンドはあくまでトレンドであって、必ずその通りにしなければいけないわけではないですよね。自分の好きなものを探求するのはいいことのはずですし。

小田桐：トレンドといえば、ジェンダーギャップ指数の高い海外では、ジェンダーレスなファッションでないと時代遅れでかっこ悪いという価値観も生まれているようですね。

坂本：ジェンダーレスなファッションでいるかどうかは、本人が決めることだと思うので、周りが批判するのは違いますよね。社会はどんどん変化していきますが、「今の社会はこうだから、今変わらなければいけない！」と考えるのではなくて、自分を見つめ直す程度に留めておいたほうがいいと思います。そうしたら急な変化に戸惑わなくて済みますし、事前にきちんと考えていたら、当事者が納得する形で選択できると思うので。

太田：僕は、全員が「同じ地球に住む人間」という種族だと考えています。これは非常に難しいとは思うのですが……、さまざまなこだわりを取っ払ってしまえばいいと思っています。男女、人種、民族、宗教など、古くから固定化された考えの違いが、争いごとのほとんどの火種になっているのではないでしょうか。時間がかかったとしても、ひとりひとりが隣人愛的な考えを持って、同じ地球市民として共存していけたらいいですよね。

北沢：「こだわりを取っ払う」にも通じると思いますが、僕は人と比べる気持ちをなるべく持たないことだと思います。自分は自分だし、究極的には他人のことはどうでもいい。みんなが幸せになることがゴールだと思うから。例えば、カップルで買い物に行ったとして、重たいものを買ったら、持てる人が持てばいいと思います。女性のほうが力があるなら女性が持てばいいし、男性が怪我していて持てないときでも女性が持てばいい。男性が持ってなくても、2人がそれでいいならそれでいいはずです。でも僕は持ちますけどね（笑）。一般的な「男だから」「女だから」ではなく、ひとりの人として、「あの人はあの人だもんね」というやさしい気持ちになれたらいいなと思います。

「男性の生きづらさ」がテーマの座談会でしたが、男女といった性別だけではなく、多様な価値観をもつ人を前にしたときに、ひとりの人間として、相手を大切にすることが大切だと感じました。

北沢さん、坂本さん、太田さん、ありがとうございました！